

# 大企業と中小企業におけるデザイン責任者が経営参画する組織の特徴

埼玉大学 人文社会科学部 専任講師

加藤 拓巳

行政情報システム研究所 主席研究員

狩野 英司

行政情報システム研究所 研究員

細井 悠貴

## キーワード

デザイン経営, ビジョン, UX, アジャイル, 共分散構造分析

## I. 研究の目的

日本企業では、開発とデザインの溝が深く、デザインが企業経営に活かせていないと指摘される。それに対し、AppleやDysonでは、デザインとエンジニアリングを統合し、デザインに優れた製品・サービスを創出している。学術研究においても、デザインの効果的な活用には、デザイン責任者を設置し(Lee & Cassidy, 2007)、全社戦略にデザインを組み込み(Joziassse, 2000)、部門間調整においてデザイン部門の妥協を減らすこと(菅野・柴田, 2013)、が訴えられている。つまり、アジャイル型開発等の具体的手段は当然有効であるが、第一には組織の整備が重要である。本研究では、まだ議論が不十分である、デザイン責任者が経営参画する組織の特徴を大企業と中小企業別に評価した。

## II. 評価方法

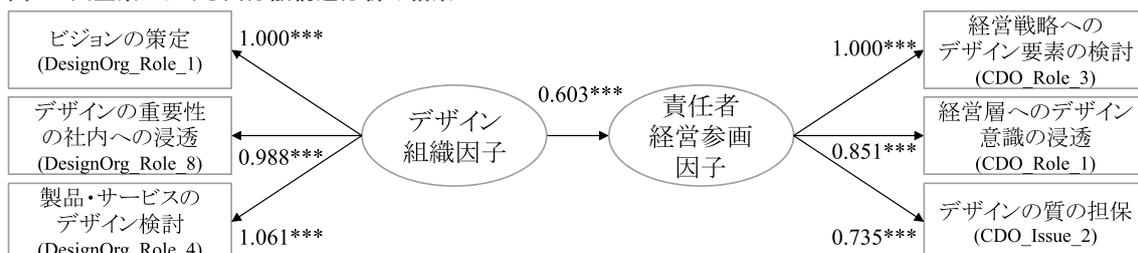
特許庁による「我が国のデザイン経営に関する調査研究事業」の中で、2019年に実施したオンライン調査の結果を使用した。当該調査は、275社に回答を依頼し、製造、IT、金融等の業界を中心に、大企業64社、中小企業32社

の計96社から有効回答を得た。デザイン責任者の経営参画、デザイナーの最上流からの参画、デザイン推進組織の設置、アジャイル型プロセスの開発、デザイン人材の採用・育成の5区分を用い、共分散構造分析によって評価した。

## III. 結果と考察

評価の結果、図-1、図-2に示すとおり、大企業ではデザイン推進組織の設置因子、中小企業ではデザイナーの最上流からの参画因子とアジャイル型プロセスの開発因子が寄与している。つまり、大企業では組織の構築、中小企業ではデザイナーの実践という対比関係が読み取れる。したがって、デザイン責任者を配置して経営への関与を強めていくには、その企業の規模を踏まえて、適切な対策を実施することが有効だと考えられる。例えば、大企業にてデザイン活用を推進する場合、デザイン組織を構築し、ビジョンを策定して全社に発信する前に、具体的な手段を導入しても効果が見込みにくい懸念がある。今後の研究課題は、責任者が経営参画している企業だけでなく、その上で経済的な効果を生んでいる企業の要因を評価することである。

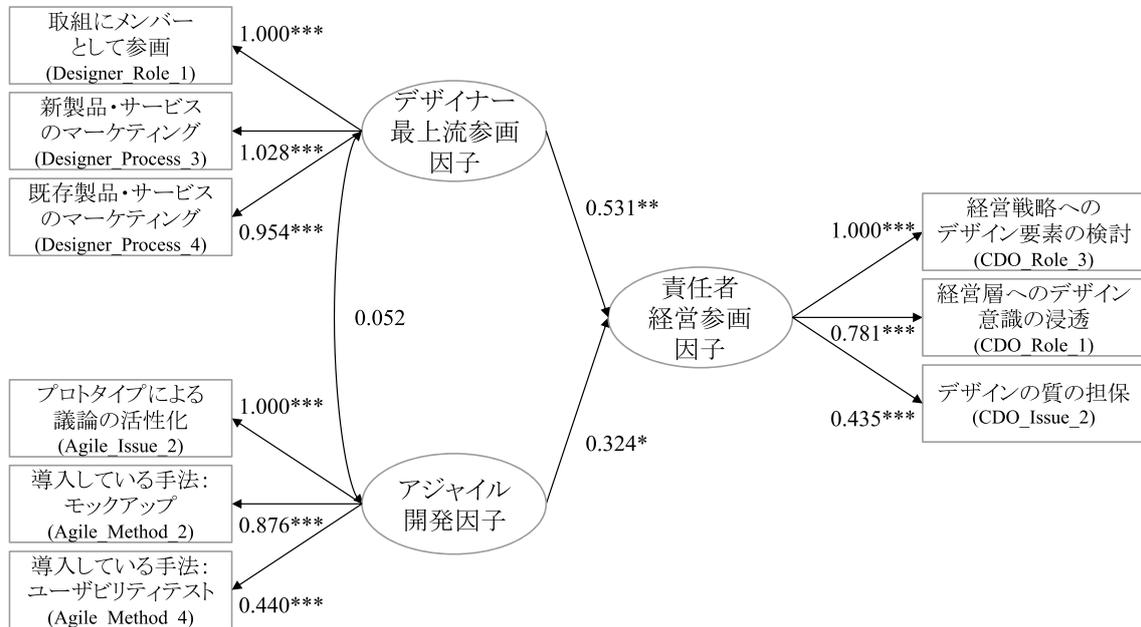
図-1 大企業における共分散構造分析の結果



CFI : 1.000, GFI : 0.960, AGFI : 0.896, RMSEA : 0.000, SRMR: 0.052

‘\*\*\*’ 0.001, ‘\*\*’ 0.01, ‘\*’ 0.05 ‘

図一2 中小企業における共分散構造分析の結果



CFI : 0.987, GFI : 0.855, AGFI : 0.727, RMSEA : 0.058, SRMR: 0.064  
 '\*\*\*' 0.001, '\*\*' 0.01, '\*' 0.05

主要引用文献

Joziassse, F. (2000). Corporate strategy: bringing design management into the fold. *Design Management Journal*, 11(4), 36-41.

Lee, K. C., & Cassidy, T. (2007). Principles of design leadership for industrial design teams in Taiwan. *Design Studies*, 28(4), 437-462.

菅野洋介・柴田聡 (2013). 「製品デザインに関わる組織要因と部門間調整」『日本経営学会誌』32, 55-68.